



【新】野球界のリーダーが挑む。「怒鳴る」から「考える」への転換

2017/2/6

監督の帝国

2020 年に向けて「日本 3.0」の時代に移りゆこうとしているなか、現在のタイミングで見直さなければならないことが、この国にはあまりにもたくさんある。

その 1 つが教育、そして人材育成のあり方だ。

強くそう感じたのは、2016 年のリオデジャネイロ五輪が始まる数カ月前、暮春から立夏に変わろうとしているころだった。

高校野球で甲子園の常連になりつつあり、数多くのプロ野球選手を輩出している強豪校を訪ねると、いわゆる古い時代の指導が行われていた。



(撮影:中島大輔)

紫煙の漂う監督室でマイクのスイッチを入れ、グラウンドで練習する選手たちに怒号・罵声の嵐を浴びせ続ける。直立不動の高校生たちは「はい」と返した直後、指揮官の教えを実践。喜怒哀楽を出さず、野球を楽しんでいるようにはとても見えない。柔順な野球ロボットたちは、監督の手で改良を重ねられていた。

監督がバックネット裏のベンチでタバコをくわえると、すかさず選手が灰皿がわりの空き缶を持ってきた。直撃する副流煙にしかめ面を浮かべているが、監督はシート打撃中の投手と打者に全神経を集中させ、灰皿を持っている生徒の表情は気にも留めない。

野球部部長は同じ「先生」という立場にあるはずなのに、威厳ある監督を恐れてか、何も言わずに遠くから見ている。

この強豪校の野球グラウンドには、まるで監督の帝国が広がっているようだった。こうした光景は全国各地で見られると聞かすが、甲子園出場、大学進学、プロ入団と結果が出ている限り、親たちはただ喜んでいるケースが多いという。

日本で学んだ英語が役に立たず

上記はいささか極端な例ではあるが、日本の部活動の象徴的な現場である。指導者が上から目線で子どもたちに指示を与え、型にはめて技術習得に走らせる。生徒に自分で考えて方法論を突き詰めさせるのではなく、最初から答えを教えて短期間で身につけさせようとするのだ。

そうすれば、甲子園出場という高校3年間における目標には近づきやすい。そのためにはサイン盗みを厭わない強豪校もある。高校時代の通算本塁打数を騒がれてプロ入りしたものの、鳴かず飛ばずで終わる選手が決して少なくないのは、こうした短絡的な指導の影響が大きい。

特集の第2回で登場する元ダイエー(現ソフトバンク)の大越基は、そうした選手を現場で見てきたという。

教育現場に目を向ければ、数学の公式や日本史の年号だけをやみくもに暗記させる受験勉強とまるで同じ構図である。詰め込み教育は、社会に出たときに本質的な意味を持たない。

本来、大事なのは子どもたちが卒業後にいかに伸びていくかのはずなのに、指導者は、生徒が自分の目の前にいる3年間の結果ばかり見ている。残念ながら、これが多くの強豪野球部の実情である。学校教育でも問題の根源は同じだろう。ただパターンを記憶させるだけの勉強は、社会に出てから何の役に立つのだろうか。

筆者の中学、高校での英語の偏差値は70近かったが、25歳でスコットランドに移住したとき、本当の意味での英語力の欠如に直面させられた。自分が全面的に悪いのだが、生活の中で求められるような、話す、聞くという能力がほぼゼロだった。どんなに文法ができて、実際の場で使えなければ意味がない。クラブやパブでつくった現地の友人たちから学ぶ生きた英語は、日本で机を並べて受けた授業よりはるかに有益だった。

もちろん、私が学生生活をすごした20年前と現在では状況が異なるだろうが、日本の学校は果たして本当に役立つ英語の授業をできているのだろうか。そうになっていることを、心から願うばかりである。

学力に込められた3つの定義

1989年に改訂された学習指導要領で提唱されたのが、「新しい学力観」だった。
『[池上彰の『日本の教育』がよくわかる本](#)』によると、「子どもの学力とは、知識の量ではなく、『自ら学び、自ら考える力』」である。

同書から抜粋すると、文部科学省が考える「学力」は3つに分けられる。

(1)可能性を学力と見る考え方

子どもが将来の進路として選んだ分野で、思わぬ力を発揮するかもしれないという考え方。「いまできないから将来もできないだろう」と決めつけるのではなく、子ども一人ひとりの可能性に期待し、将来の能力を発揮できる教育環境を整えて、根気強く教育を続けることが大切だと解説されている

(2)習得した能力を学力と見る考え方

家庭や地域社会でのさまざまな体験を通して能力を高めることが期待されている

(3)創造性を学力と見る考え方

詰め込み教育だった過去を(文部科学省が)自己反省し、「自ら考えたり、判断したりして、よりよく解決したり、実現したりする創造的な資質や能力」が一番重要だという考え方

上記3つの中で特に重要だとされるのが(3)だ。しかし、日本人の多くに「自分で考える力」が足りていないのは、世間の知るところである。1980年代末に学校教育を受けた者として、創造性を伸ばすような教育を受けた記憶はない。すなわち、役所によっていくら立派な方針がつくられようとも、現場の教育に落とし込まれていないのだ。

ニュータイプの野球指導者たち

今回の特集は「野球に学ぶ、超一流の育て方」と題し、野球を題材に教育、人材の育て方を改めて考えたい。ある部分で突き抜けた才能を持つ人間の、その能力を伸ばしていくスポーツの指導法は、ビジネスパーソンの育成にも役立つはずである。野球を切り口に選んだのは、「変わらない日本」の象徴だからだ。

長時間労働、サービス残業、パワハラ、ガバナンスの欠如、自分で考えて行動できない社員……昨今日本の問題となっている諸テーマは、野球界でもまったく同じようなことが起こっている。

プロアマの対立、セ・リーグとパ・リーグが足並みをそろえないプロ野球など、「日本野球」として一つになれない野球界は、客観的に見て斜陽産業だ。特に少年レベルの競技人口減少は深刻である。

しかし、プロ野球とアマチュア野球、高校野球は利権や歴史を重んじてか、すぐに一つになろうとはしない。正直、嫌気が差すばかりである。ただし、トップのあり方がなかなか変わらないのを尻目に、現場で何とかしようとする人たちがいるのも事実だ。

上の姿勢が変わらない以上、現場の自分ができることをして少しでも変革を促していくしかない。そうした危機感が火をつけてか、ニュータイプの指導者が現れている。



仙台育英高校時代の1989年夏に甲子園準優勝、1992年ドラフト1位でダイエー(現ソフトバンク)に入団した大越基(左)。現在、山口県の早鞆高校で監督を務めている(撮影:中島大輔)

野球の指導現場では冒頭に述べたようなシーンが象徴的である一方、建設的な発想で選手たちを伸ばしている監督、コーチも少なからずいる。今特集では、そうしたクリエイティブな者たちを取り上げていく。

第1回は、元甲子園球児で現役大学生の寄稿をお届けする。

入学当時、野球部の底辺にいたこの元球児は、周囲との差を埋めるために、自分の頭で考え抜いた結果、甲子園出場を果たし、そして野球で培った「問題解決能力」が受験勉強でも生かされた。

日本には「野球バカ」と揶揄される選手や元選手も少なくないが、この元球児が実践した考え方をもっと広めていけば、大げさに言えばプロ野球選手のセカンドキャリア問題、さらに部活やスポーツ教育のあり方も変わっていくかもしれない。

第2回は甲子園準優勝投手で、1992年ドラフト1位でダイエー入団、現在は山口県の早鞆高校で野球部を指導する大越基の教育論を紹介する。

日本のトップレベルで栄光と挫折を知ったからこそ、大越は新しい境地にたどり着いた。

第3回は、中田翔(日本ハム)、藤浪晋太郎(阪神)ら一流プロ野球選手を次々と生み出す大阪桐蔭の名将・西谷浩一の指導法について、同監督が無名時代から取材するスポーツジャーナリストの氏原英明氏にレポートしてもらう。

甲子園の結果のみならず、選手たちが卒業後に大きく飛躍する秘訣は“個別性”にある。

第4回は、大谷翔平、中田翔などドラフト1位のみでなく、中島卓也、近藤健介ら、中位から下位指名選手も主力に育つ日本ハムの若手教育を取り上げる。

なぜファイターズの若手は伸びるのか、そのカギは教育にある。プロ野球界で独特な考え方と取り組みは、企業の若手育成にもヒントになるはずだ。



(撮影:武山智史)

第5回からは海外に目を向ける。

多くの一流メジャーリーガーを輩出するベネズエラとドミニカ共和国では、日本とは異なる教育の考え方が存在する。

第7回は野球界の外に目を向け、テニスの錦織圭を米国IMGアカデミーで指導したトレーナーの中村豊氏に話を聞いた。

アメリカには日本の文脈とは異なる「勝利至上主義」があり、そのサイクルをうまく回すことで選手が育っている。もともと野球少年だった中村氏の視点は、示唆に富む。

改めて言うまでもないが、教育は国家の根幹をなすものだ。人材育成がうまく行かずして、国にとって明るい未来はない。

今特集では野球を通じて教育、人材育成に新たな光を当てている者たちの取り組み、考え方を紹介しながら、ピッカーの皆さんとともに教育の重要性、あり方について改めて見直していきたい。

野球に学ぶ、超一流の育て方

1. [【新】野球界のリーダーが挑む。「怒鳴る」から「考える」への転換](#)

2. [「野球バカ」をクリエイティブ人材に変える方法](#)
3. [【大越基】高校野球で勝利と育成は両立できるか](#)
4. [【大阪桐蔭】中田翔、藤浪らエリートを育てる個別性指導](#)
5. [育成＝組織力。大谷翔平も問題児も伸ばす、日本ハムの若手教育](#)
6. [【ベネズエラ】MLB 候補生を夢に導くモチベーションルコーチ](#)
7. [【ドミニカ】超競争社会＝MLB で勝ち抜くための教育](#)
8. [テニス界になぜ錦織圭は現れたか。米国流「勝利」至上主義](#)